天野屋

チーム：にじ

メンバー： 20N1033 小此木祐也

20N1001 相生光希

20N1010 石川源太

20N1060 四方詩織

20N1098 西宮和

■天野屋を選んだ理由

御茶ノ水のビルが立ち並ぶ中に、そこだけ昭和を感じさせる独特の雰囲気を醸し出していた建物で、お店内部も店員のお母さん達の暖かい雰囲気に包まれており、なぜここに残り続けたのか、天野屋の歴史や周辺建物との関係性に興味を持ち、建物を残していきたいと考えた。
ここで私たちは二つの疑問を持った

疑問１
ビルが建ち並ぶ中なぜ残り続けているのか
疑問2
都市の中にある中庭に魅了された。この魅力とはなにか？

■目標

ビルが立ち並ぶ中、残り続ける理由を探る
中庭の存在を明確にする

最初の段階では実測の許可を得ることができなかったため、実測をさせてもらえるよう、成果を見せながら通いつめる

↓

周辺の実測により疑問1の解決を試みた

■都市模型、立面図の作成を経ての考察

50メートル近い無機質なビルが立ち並ぶ中、天野屋は歴史の感じられる立面をもち続けている。
都市模型と立面から、小さいながら力強いたたずまいに納得ができた。

→ 疑問１の解決

通っていると、サラリーマンが出勤前に甘酒を一杯飲みに来たりと、会社員の憩いの場所としても残り続けている。

■都市模型制作前に取った写真

■ 実測に向けた経緯と目標

実測をするためにはお店の方の許可が必要。 作った都市模型とこれから知りたいことを素直に話した結果、 許可を得ることができ、 実測を行った。

↓

内部の実測により、 疑問２にある中庭の魅力を読み解いていくことを目標とした。

■ 実測を経ての考察

中庭部分が全体の 16％ほど占めている
中庭：内部空間＝1：5
→一般的な住戸よりも庭の面積は狭いが、 奥行きによって広く感じ、 アットホームな空間となっている
中庭は台形をしており、 内部から見ると奥行を感じられるような作りとなっている
入口が狭い分、 中庭の開口の大きさが強調され、 より魅力が増している
角地に立つ敷地形状から中庭はこのような形状になったと思われるが、 この敷地がかえって、 中庭を強調するような役割を果たしている。

→ 疑問２の解決

■ 全体の考察

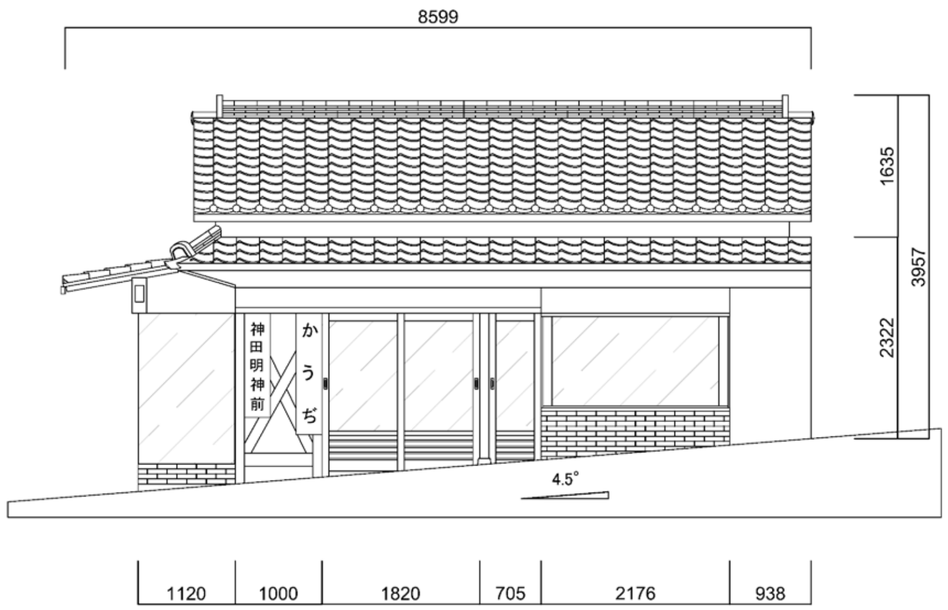
内部を実際に測量してみると、 席と席の間隔がかなり狭く、 他のお客さんとも距離が近くなるようなつくりとなっていた。 天野屋さんは現代でいう横丁や居酒屋のような、 分け隔たりなく時間を過ごすことができる場所で、 お店の暖かい雰囲気の要因のひとつかもしれない。
建物の柱や梁などのサイズやスパンは一般的な軸組み工法となっていた。 屋根は切妻屋根に庇をつけたようなものと、 片流れ屋根を組み合わせていた。
お店の人に聞いたところ、 お店の名物の甘酒をつくるための「室」はもともとは今よりも何倍もの大きさがあったが、 1990 年頃に、 周辺にビルが立ち並んだことで、 安全のためにほとんど埋めることになってしまったという。 建物の高層化など進む中で、 このような困難に悩まされながらも、 天野さんやお店の人の努力で代々受け継がれた味を残し、今もお店を続ける天野屋さんは本当にすごく、建物があり続けられる意味が理解できた。

■ 実測時に取った写真

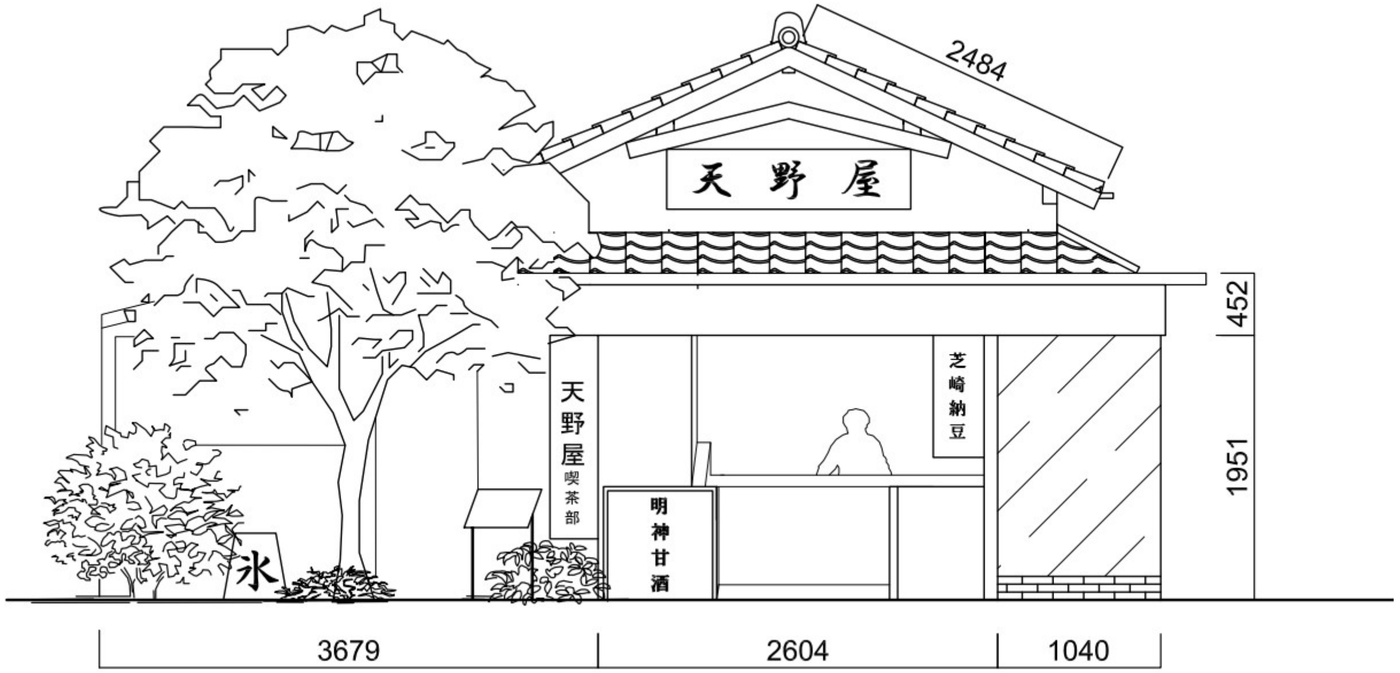
■ 模型写真

■1/1000 配置図

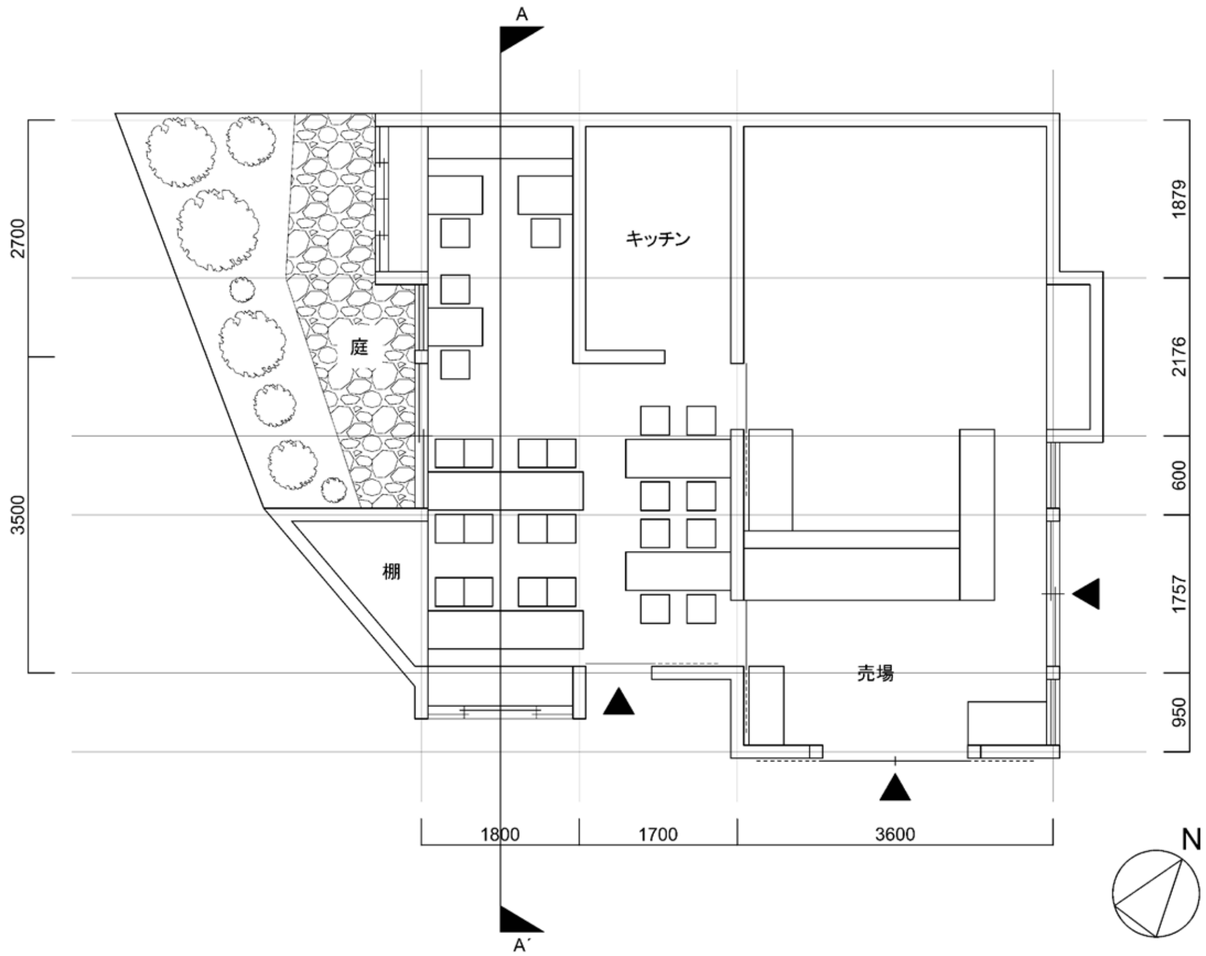
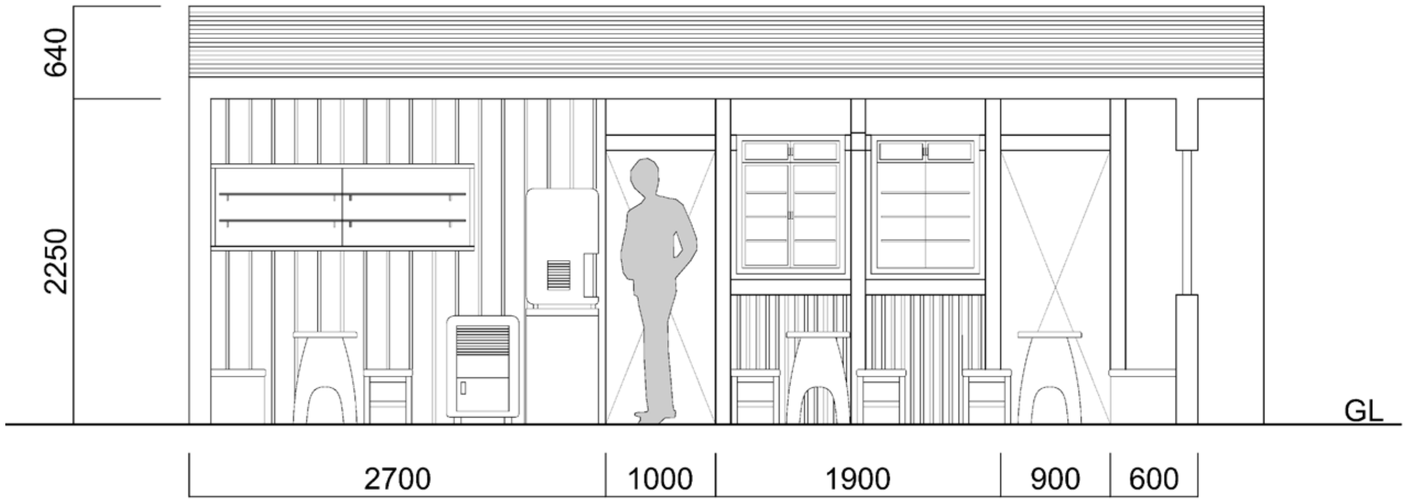
■1/50 東立面図



■1/50 南立面図



■1/50 平面図



■1/30 A-A’断面図